

## 3) 治療

	研修医が単独で行ってよいこと	研修医が単独で行ってはいけないこと
処置	A. 皮膚消毒・包帯交換 B. 創傷処置 C. 外用薬貼付・塗布 D. 気道内吸引・ネブライザー E. 浣腸	A. ギプス巻き B. ギプスカット C. 胃管挿入※ D. 気管カニューレ交換※ E. 導尿※ F. 気管挿管
注射 ※穿刺については 2) 検査を参照	A. 皮内 B. 皮下 C. 筋肉 D. 末梢静脈 但し、抗癌剤などの薬剤漏出時の対応については習熟が必要。	A. 中心静脈 B. 動脈 C. 関節内※
麻酔	A. 局所浸潤麻酔	A. 脊椎麻酔（脊椎くも膜下麻酔） B. 硬膜外麻酔 C. 局所伝達麻酔（神経ブロック） D. 全身麻酔
外科的処置	A. 抜糸・創傷処置	A. 皮下の止血、膿瘍切開・排膿※ B. 深部の止血、膿瘍切開・排膿 C. 局所伝達麻酔（神経ブロック） D. 皮膚の縫合※ E. ドレーン抜去※
処方	A. 一般の内服薬 B. 注射処方（一般） C. 理学療法 いずれも処方箋の作成前に、処方内容を指導医と協議する。	A. 内服薬（向精神薬） B. 内服薬（麻薬） C. 内服薬（抗悪性腫瘍薬） D. 内服薬（小児の鎮静薬） E. 注射薬（向精神薬） F. 注射薬（麻薬） G. 注射薬（抗悪性腫瘍薬）
輸血	A. 輸血検査 B. 輸血の実施 実施にあたっては、必ず他のスタッフとダブルチェックを行い、輸血によるアレルギー歴がある場合は無理をせず上級医・指導医に任せる。	A. 輸血方法（血液製剤の選択、用量）の決定

※手技に習熟し、指導医の許可があれば単独で行ってもよい。